

唐門復元工事『彩色』の巻



内庭にある唐門は、令和2年(2020年)秋に復元工事が完成しています。令和3年は「扁額」、令和4年は「彫刻」にスポットを当てて、工事を担当された専門家お二人の講演、パネル展示を開催しました。

今年の秋は、その第三弾として「彩色」を取り上げます。今までの講演を聞き逃されたみなさまにもお楽しみいただけるよう、「扁額」「彫刻」それぞれの振り返りもご用意していますので、今年の予習と併せてご覧ください。

「唐門」ってどんな門？

小石川後樂園は江戸時代初期の寛永6年(1629年)、水戸徳川家の祖・頼房が、その中屋敷に造成を始め、二代藩主・光圀の代に完成した庭園です。

屋敷は、現在の東京ドームの辺りに位置しました。園内、東側にある屋敷の書院庭園(プライベートな日常的空間)が「内庭」、大泉水を中心とした部分が「後樂園」と呼ばれ、お客さまを“おもてなし(非日常的な空間での饗応)”するためにも使われました。「唐門」は、「内庭」から「後樂園」に向かう正式な入口で、ふたつの空間を分ける境界線の役割も果たしています。

「唐門」の創建は、江戸時代初期、明から亡命した朱舜水による扁額があったことや、施された彫刻の時代性から寛文9年(1669年)ごろ、水戸徳川家二代藩主・光圀の時代と推定されています。

「彫刻」と「彩色」

唐門とともに焼失した彫刻は、焼失前の古写真や絵図から形状を推測し復元されています。

【彫刻作業】

古写真をもとに、彩色担当者が作成した線画から、彫刻師が改めて下絵を作成し、厚さ3寸(約9cm)の板を用いて複数の彫刻師が分業で彫刻を行いました。

今回は唐門完成当時(江戸時代初期)の彫刻とすることから、粗彫の段階で全体的にまるみをつけた形状とするよう、注意しながら進めています。それぞれのモチーフをなめらかに仕上げていく仕上げ彫では、梅の花や瑞雲の形など、彩色に合わせて細部を整えました。また、彩色がしやすいよう、葉脈や鳥の羽などは彫刻をしていません。

彫刻は入念に打ち合わせを重ね、各段階で専門家にチェックも受けながら進め、約11ヶ月かけて完成しました。

【彩色作業】

完成した彫刻に色をつける彩色は、林守篤(もりあつ)が著した『画筈(がせん)』をもとに行われました。

『画筈(がせん)』は、日本画を画題別に分けて、技法について論じ、絵具や画材について製法などを説明した、絵を学ぶための手引となる教本です。

彫刻された丹頂(タンチョウ)、三光鳥(サンコウチョウ)、錦鶏(キンケイ)など、『画筈』の中では、それぞれ部位ごとに細かく色が指定されています。彩色作業では、**岩絵具(いわえのぐ)**を使用して、その色が忠実に再現されました。



《『画筈』明治大学博物館所蔵》

それでは、この**岩絵具**とはどんな素材で、どのようにして使用するのでしょうか？ また、彩色作業を行うのに苦労した点や、工夫を重ねた点など、今年の「特別講義」でも、昨年同様、実際に施工管理を担当された専門家お二人が詳しく解説をしてくださる予定です。どうぞ、お楽しみに！

「特別講義」の日程、参加方法などは、決まり次第、ご案内をいたします。

この秋も、「特別講義」のほかに、文化財にかかわる催しをいくつか開催する予定です。こちらも、決まり次第、ご案内をいたします。

みなさまの探求心が満たされる秋になりますように。